

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

2019年 12月 24日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 理学研究科 生物科学専攻

職名・学年 博士後期課程3年

氏 名 黒田 凌

助成の種類	令和元年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	8th Asian-Oceanian Symposium on Plant Lipids (ASPL2019)		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発表題目	Functional analysis of <i>PIP5K7</i> , <i>PIP5K8</i> , and <i>PIP5K9</i> in <i>Arabidopsis thaliana</i>		
開催場所	オーストラリア・キャンベラ・CSIRO		
渡航期間	2019年 11月 17日 ~ 2019年 11月 24日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000円	
	使用した助成金額	200,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空賃(往復):	110,000円
		宿泊料:	70,000円
学会参加費:		20,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 助成における連絡や対応等が非常に迅速かつ的確で大変助かりました。また、多大な助成をいただけたことで国際学会に参加することができ貴重な経験をさせていただきました。本当にありがとうございました。このような素晴らしい助成制度がより多くの学生や研究者に広まり、多くの若手研究者が国際学会に参加できるようになればいいなと思いました。		

成果の概要 / 黒田凌

[国際会議の概要]

令和元年 11 月 19 日～11 月 24 日にオーストラリア・キャンベラの CSIRO にて 8th Asian-Oceanian Symposium on Plant Lipids (ASPL2019) 「(和名)第 8 回アジア・オセアニア植物脂質シンポジウム」が開催された。ASPL は 2 年に一度開催されるアジア地域の植物脂質研究に関するシンポジウムである。植物や藻類の脂質に関する代謝経路、分析法の開発、シグナル伝達など、植物脂質における多岐にわたるテーマで口頭発表が 55 題、ポスター発表が 24 題行なわれた。これまでの ASPL は日本、中国、韓国、シンガポールといったアジア各国で開催されていたが、ASPL2019 はオーストラリアで開催された。そのため、オーストラリア人などアジア人以外の参加者も多く、ネイティブな英語での討論が行われていた。また、開催場所であるオーストラリア連邦科学産業研究機構(CSIRO)はオーストラリア最大の総合研究機関で、農業、環境、情報通信、製造など研究分野は広範にわたる。CSIRO で開催されたことから、植物以外の脂質研究者の発表があり、植物だけでなく動物などの脂質について考える機会が設けられていた。

[発表の概要]

私は、生体膜上に存在するリン脂質である PI(4,5)P₂ の産生を担う酵素 PIP5K の機能解析を行なっている。PIP5K の研究は植物脂質のシグナル伝達が主に行なわれており、植物脂質シグナル伝達は今後発展が期待される研究分野であるが、国内では専門的に扱う研究者は少ない。そのため、本学会で国外の植物脂質シグナル伝達の研究者とディスカッションができたことは非常に貴重な経験となった。特に、ミシガン州立大学の Susanne Hoffmann-Benning 教授は植物脂質のシグナル伝達について研究しており、ポスター発表において私のポスターを聞きに来てくださり、研究結果の考察や自身の研究を進展させるような討論を行なうことができた。Susanne Hoffmann-Benning 教授以外にも多くの先生方と意見を交わすことによって、今後の研究生活の糧とすることができた。また、Chye 教授による膜脂質と環境応答や Meikle 教授によるリポドミクス、Chapman 教授による脂肪滴と貯蔵脂質などの研究成果に関しては過去の研究から最新の研究まで幅広く発表されており、自分もこのような発表がしたいと思い自身の目標となった。

[謝辞]

本学会への参加は私の初めての国際シンポジウムの参加となりました。京都大学教育研究振興財団の援助がなければまだ先になっていたと思います。研究者としてだけでなく、人として貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。本学会に参加するにあたりご支援いただきました京都大学教育研究振興財団に心から感謝申し上げます。